



撮影／池田年夫（上）／米田定蔵（下）

神戸新百景

〈9〉

元氣アツプ「神戸南京町春節祭」



鳳蘭

恭禧！ あけましておめでとーございます。

一九九九年の神戸南京町春節祭は、二月十九日（金）から二十一日（日）の三日間、旧暦のお正月に開かれます。

「春節」には、深紅色の「春聯」（新年に門や入口に貼るおめでたい紙）などを張りだし、爆竹を鳴らし、あのバ・バ・バ・バーン！とはじける音が威勢よく響き渡ると、わくわく心が踊り、獅子舞や龍舞が、南京町をねり歩くと、元氣パワーアツプ、不景氣風を吹っ飛ばしてくれそう…。

あの阪神・淡路大震災に見舞われたとき、南京町は「春節祭」準備の真最中。だからいち早く、プロパンガスで豚のステーキを売る店や、中国茶の無料サービスなどが始まり、次から次へと店を開いて神戸っ子たちを励ましてくれました。五月には元町通で「神戸五月まつり」を開いて、官がやらないのなら民でやると獅子舞や、龍舞、サンバナ

どでパレード。暗く落ち込んでいた人々が拍手を送って、元氣が出ると喜んだそうです。

さすが神戸の華僑の心意氣と嬉しい限り…。

翌年の平成八年の「春節祭」は、阪神高速道路の再開を祝して開かれ、昨年の平成十年は、四十六万人の来街者があって、嬉しい悲鳴をあげるようになったとか。

明石海峡大橋開通の前景氣を盛りあげて、觀光都市神戸復活のはずみをつけたのです。あっぱれあっぱれ！

いずれにしてもあの南京町の楽しさは、食べることですね。ラーメン、豚まん、焼豚、チマキ、ゴマまんじゅう etc。屋台で食べ、中国料理の食材を買ったり、またごひいきの中国料理店へ。やっぱりお正月はいい、年をとらなければもつといいのだけれど…。私のルーツは神戸。

この華僑のパワーが、心意氣が、芸の源です。

◇ミュージカル女優◇

□ 私の意見

十周年を迎えて

神戸の皆様にあ愛されるホテルを



望月 恭夫 (ホテルオークラ神戸取締役社長)

平成十一年(99年)ホテルオークラ神戸は十周年を迎えます。私が東京から神戸へ参りましたのが平成元年の一月三日。生れが清水港なので、メリケンパークの港風景は懐しくて、温暖な気候と山海の珍味がたくさん味わえるところもよく似ていて、今や神戸は第二の故郷という感じです。

阪神・淡路大震災では、ハーバーランドのマンションの十階で、もう最後かと思うほどの揺れを体験。ホテルオークラ神戸もおかげ様で三月一日に再開して、全国からのご助力もいただいて多少明るくなっていたのが、昨年末からの不況風でまた厳しい状況になりました。

しかし、明石海峡大橋の完成によって、再び神戸も観光的に上昇気流となり、今、八十%回復というところですよ。 「ルミナリエ」は四年目になり、神戸といえばルミナリエと

いう言葉が、やっと定着して、近畿エリアや東京あたりからもお泊りがふえて参りました。

私どもも十周年を迎えてやっと、神戸のホテルオークラということを神戸の皆さんに認識いただけってきたと思っております。

元町商店街の皆さんや、北野町のジャズコンサートとご一緒に企画をやっていくような、街とホテルと百貨店が共同作戦で観光を盛りあげたい。

十周年の企画は、今、若手のスタッフで練っていますが、特に地域の皆さんの参加型のプログラムを考えて、いろいろと企画中です。

二十一世紀に向けて、市民の皆様にあ愛されるホテルをめざし、ウォーターフロントの海の回廊づくりや、港の魅力と共に観光の「核」にしていきたいと願っています。

STEP GLOBALLY STEP NATURALLY

地球を歩く

自然に歩く

STEP COMFORTABLY

快適に歩く



足に合ったヘルスシューズで快適歩行



「健康な足を健康に保ち、傷んだ足をいたわることを基本理念に、株式会社アリスは、日本で初めてドイツの整形外科靴マイスターを招聘し、健康靴に関するトータルなサービスを提供しています。健康な足を健康に維持されたい方も、足に悩みをお持ちの方も、最新の整形外科水準に基づいて作られ、ドイツから直輸入の健康靴をぜひお試しください。」

株式会社アリス代表取締役 アリス・クリスチャンス

Japan's Premier Health-Shoe Specialist
高級健康靴と関連資材輸入・機材輸入



アリス

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通り5-6-6
TEL:078-382-2101 FAX:078-382-2150
営業時間:10:30a.m.~6:30p.m.年中無休

酔眼流旅日記 〈29〉

ムラマツ宴会の歴史(六)

村松 友視

題字／筆者

イラスト／灘本唯人

糸井重里についての思い出を、もうひとつ書いておこう。

私は、今から十五、六年前に、四か月ほど神戸で暮らしたことがあった。吉祥寺の家を建て直すため、神戸の山本通りにあるマンションへ、仮住居を決め込んだのだった。カミさんと猫は吉祥寺の家の近くに間借りした部屋に住み、私だけが神戸で暮らすということになったのだ。

そうやって神戸での時間を過ごすうち、色々な知り合いもできるし、馴染みの店もできてくるうち、神戸を舞台にした小説を書きたくなかった。四か月の神戸暮らしを終わって吉祥寺の新居に落ち着くと、私はさっそくこの作品の構想にとりかかった。

その頃、原宿かどこかで偶然、糸井重里に会った。世間ばなしをするうち、一行二千万とかいう売れっ子コピーライターの糸井重里に、小説のタイトルをつけてもらったら面白いと思った。そこで、舞台は神戸、タイトルにも神戸の文字を織り込んだ作品にしたいんだけど、何かいいタイトルつけてくれないか

なあ……と申し出てみた。

「ああ、それって面白そーですね」

糸井重里は、とりあえず乗り気という顔をつくった。そこで私は、「あのね、神戸という二文字を織り込んだタイトルの中で、俺がもっともすごいと思っているのが、クール・ファイブの『そして、神戸』なんだよね。だからさ、『そして、神戸』以上のタイトルをつけてくれないと困るんだよね」

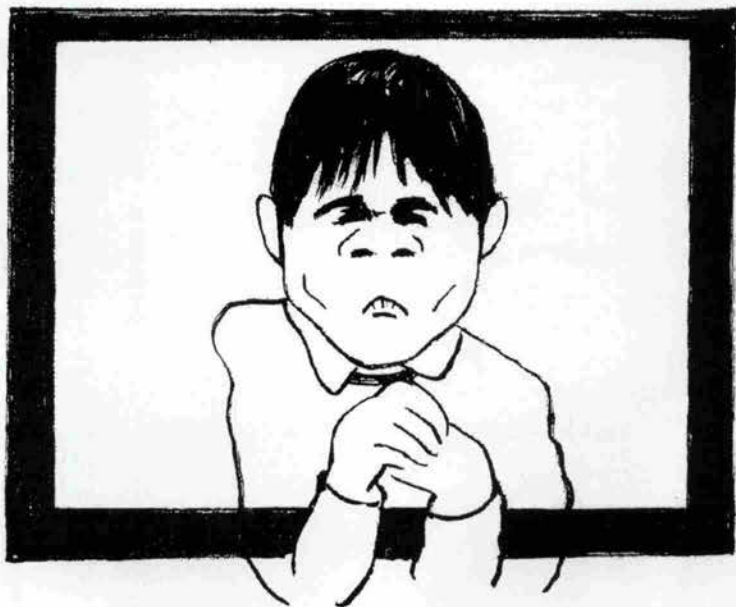
と言った。それに対して、糸井重里は妙に自信ありげに、「あー、分りました」

と言ったのだが、その表情に怪しい気の弾みを見た私は、「あのね、『そして神戸、以上』っていう題は駄目だよ」

と、念のため釘を刺してみた。すると、糸井重里はバレたかという顔でニッコリ笑い、

「分りましたあ？」

と言ったものである。まったく、コピーライティングものは油断



ma

がなりません。「そして、神戸」以上のタイトルという注文に、「そして神戸、以上」をもってこようてんだから……私は、あきれながらも我が心をも反省した。小説家が小説のタイトルを、売れっ子のコピーライターに依頼するというのは、やはりある種のカンニングだ。作品のタイトルは自分でつけるべしという、イロハのイみたいなことを、この顛末はかみしめさせてくれたというわけだった。

そして、私は神戸を舞台にした小説を書き始め、そのタイトルを「メロドラマ」とつけた。メロドラマは、けっこう悪口に使われる言葉だ。あれじゃメロドラマだよ、メロドラマのレベルだ……といったセリフが頭に浮かび、いっその「メロドラマ」をタイトルにしてやろうというプランだった。そのタイトルをちよいとばかり気に入って浮き浮きとしていた昼下り、だったか午前中だったか忘れだが、糸井重里の顔をテレビ画面で見、何だろうと目を凝らした。

いつものトーク番組やバラエティ番組ではなく、何か制作発表とあったムードが、画面から伝わってきたからだだった。どうやらそのシーンは、糸井重里が初のテレビ・ドラマを書きおろした、その制作発表のようだった。まあ、糸井重里ならテレビ・ドラマも上手に書くだろうと、私は漠然と画面を見ていた。そして、その糸井作品のテレビ・ドラマのタイトルを見て、私は仰天してしまった。何と、それは「たとえばこんなメロドラマ」というタイトルだったのだ。「そして神戸、以上」から「メロドラマ」へ、そして「たとえばこんなメロドラマ」へ……、この間に因果関係があるかないかは、いまだに本人にはたしかめていない。だが、私の側からはちよいと贅沢な起承転結というか序破急というか、でありました。

21世紀をめざして 20年EXPOを提唱する

浜野安宏 (株)浜野総合研究所代表取締役社長

小室豊允 (姫路獨協大学・経済情報学部長)

諸岡博熊 (UCCコーヒー博物館・特別顧問)

司会 小泉康夫 (月刊神戸っ子・会長)

本年一月十七日で阪神・淡路大震災から丸四年になる。この間、かなりの部分で復興が進んだ。だが、**「あと一歩」**。これが難しい。そこで論客にお集まりいただき、神戸復興への**「決め手」**を縦横に語っていただいた。

小泉 浜野先生には、今回わざわざ東京からおいでいただいた。震災後の神戸にも何度かいらっしやっていると聞くことだが、最近の神戸の印象を。

浜野 神戸に情熱を傾けていた時期があるので、なんかフツとしらけたような感じがする。神戸にかぎった話ではないが、日本のあちらこちらのまちの用心棒(笑)をしていていちばんしらけるのは、大きな夢を一緒に語っていた地元の人々が、公用地を私有地に還元したとたんに私利私欲に走りはじめてしまうこと。

ポートアイランドにしても、初めころ安藤忠雄さんやぼくは、共同所有の土地にファッションが生まれるすばらしいまちをつくろうと、きまじめな絵を描いていた。しかし私有化が始まると、行政は早く権利を渡してしまおうとするし、民間企業や個人は何とか自分のものになろうと血まなこになり、



まず神戸の現状をみつめる

ことが必要

そしていったん自分のものになったら絶対手放さないでおこうというふうで、ぼくらの居所なんてないという感じになつてしまった。言いにくいことだが、長田区なども私有権が小さく分散して、なかなか再開発が進まないまま地震にあつてしまった。再開発が緒についていけば、あんな大惨事にならなかつたのでは、というのもひとつの視点としてある。

小室 ニューヨークの発展は、ロックフェラーの国連への無償の土地提供に拠るところが大きい。元はスラム街だった地域だが、国連の周辺がどんどん発展して、結局何百倍、何千倍にもなつて戻つてきた。自分のものだからとわずかな土地にしがみつくな、大きなリターンを求めて自分の土地を提供するかというところに、地方都市と国際都市の違いがある。

浜野 それは、担保能力を上げる作戦でもある。そんなことは分かり過ぎるほど分かつているはずなのに、このへんでいい、と抱え込んでしまう。

小室 博多をずっと定点観測している

が、博多の発展は神戸に比べて格段上。しかし神戸に似たようなまちはほかに、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ニース、シドニーなどがある。そういう世界の都市間で競争が起こつているときに、目先のことにこだわったり、国があいつている、大阪財界がこういつているから遠慮しておこうなんていうのでは、神戸は生き残れない。

諸岡 いま世界の流れは「RIEDO」にある。Rはrevolution。Iはidentification。変革、意識の改革だ。Iはidentity。個性化、とでもいつたらいいか。戦後の経済は民主化から社会化に移つて、いまは個性化の時代に入つていくというのに、行政はまだ民主化の段階で足踏みしている。神戸はもつとまちの特色をださなくてはいけないと思う。Eはevaluation。評価。人、モノ、金を自由にして業績を評価するということ。サッチャー元首相は行政改革で評価をとりいれ、ニュージーランドでも真似をした。一九九三年にはアメリカが行政

業績評価法をつくつた。日本ではあま

りとりあげられないけれど、評価というのはとても大事なことから、これを早くやらなければいけない。Dはdiversity。多様性。現実に神戸は多文化都市だが、これからどう多文化に対応するかが大きな問題。そしてOがOutreach。他に働きかけて、協力体制をつくるということ。これら五つを世界の各都市間、大学、ミュージアムなどのインターナショナル・パートナーシップでやらなければ。この流れに早く乗らないと、神戸は立ち遅れてしまうと思う。

小室 本格的な多文化社会は必ず来ると思うが、日本の都市の中でそれが一番ふさわしいのは、歴史の浅い神戸だろう。長い歴史をもつ京都、大阪に比べると、たかだか百年あまりの歴史しかないのだから。

いま立ち上げようと思つている。神戸でも多文化都市を目指すなら、何かシンボリックなことをやらないと、皆よそにもつていかれてしまう。

小室 博多と神戸を見ていてどこが違うかというところ、まず博多は空港が都心に近いということ。これは決定的だ。二つ目に、博多は名物の屋台が都市のわい雑さをうまく演出している。一方神戸は、神戸まつりで事件が起こつたのをきっかけに、屋台だけでなく、いろいろなことに規制がかけられてしまった。三つ目は、博多には先行きがよく読めなくてもしつこく暴れまわつて、とにかくやってみようという人がいるが、神戸の場合はそういう人を育てようとしれない。むしろ、だれかが出てきたら踏み潰す。

諸岡 そう思う。

浜野 神戸はもつとアジアと密接に、という話をよく聞くが、本当にそう思うなら早くやらないといけない。現に福岡は、地理的にもアジアに近いが、まちもアジアとつながりといういろいろある。例えば使いみちの決まっていな市民有地に、アジアの人が来たときに安く宿泊できて、食事、ショッピング、ミーティングなんかもすべてできるようなものをつくろうというのを、

それが、すぐチマチマと自分のものにしてしまつて、皆でやろうとしない。これを直さないと。そういうところが空港のスケールの小ささにもでてきているように思う。行政も、大きな話をする時住民に反対されるだろうと、最初から半身で逃げているような気がする。思い切り夢のある大きな話にしたなら、もしかしたらもつと早くに実現したかもしれないのに。

小室 そして四つ目はダイエー。これが博多に来たのが大きかつた。

カジノがなぜ悪い？

ぜび思い切った発想を

小泉 神戸空港の話が出たが、小室先生は以前から、関西空港と神戸空港を関連づけたアクセスを提案していらいやる。

小室 いまの関空を第一ターミナル、二本目の滑走路を第二ターミナル、神戸空港を第三ターミナルとして、さらに新神戸駅までを鉄道でつなげと言っている。これができる、関空から新神戸まで三十分で来れる。

浜野 関空と神戸空港をひとつの空港として考えたらいいのだろうか。ちょっと離れたところに第三ターミナルがある、と…。

小室 そう。そして、神戸空港ではエア・カーゴを飛ばす。少なくともエア・カーゴについてはインターナショナルでやる必要があると思う。

二十一世紀初頭には、ニューヨークまで六時間くらいというスーパープレインができる予定だが、こういうものも飛ばせたら…。それには、四千メートルの滑走路が要るが、実現するしないはともかく、そういう発想をすることが大事。規制にしばられてわれわれ

の発想もつい縮み思考になってしまっ…。

浜野 同じ夢を描くなら、大阪ベイエリアに四千メートルの滑走路を六本つくるとか。そういった空港がいま日本に望まれているのだから、相も変わらずローカルの小さな空港をつくっていいのかという感じがする。コロラド州のデンバーは、四千メートルの滑走路を十二本備えた空港をつくって、一挙にまちおこしをやった。だから神戸でも十二本をというのではないが、それくらいの大きさでものを考えないとダメということだ。

小室 空港問題には、ぼくは推進の助っ人として加わって議論しているのだが、行政のいう空港が既成概念に捕らわれているために、よけいに反発を招いているという面がある。

浜野 何か決定的なアイディアが要ると思う。人工島に空港ができるのなら、そこだけに許されるビジネス、たとえば国際カジノホテルを十軒くらい建てるとか。神戸の主婦からにらまれるかもしれないけど(笑)。

小室 幸い神戸空港は海上にできるから、二十四時間空港にして、アミューズメント・ショッピングセンターにすることもできる。つまり飛行機を飛ばすだけでなく楽しむ場所にするということ。そうなれば、もちろんカジノも入る。

カジノをつくろうとか、関税のかからないフリー・トレード・ゾーンをつくろうという提案は震災直後からしてきたが、国の規制にはばまれて実現しない。

浜野 ラスベガスなんて、いまや老人と子供の楽園(笑)。もっと明るく、ワイドで、実現性のある目で見ること、スケールを大きくすることが大切だ。そうでなければ、実現するものもなくなる。

そもそも競馬、競輪、競艇が許されて、なんでカジノがいけないのか、ふしぎでしかたない。もし神戸に国際空港ができて、その周辺でカジノができるなら、二百億円以上投資する国際カジノ資本を五社はもってくる自信がある。世界中の資本家、政治家とつきあっていて、投資先としてはやはり日本が安全だ、何とか金を入れさせるといふのをしょっちゅう聞く。しかし、相変わらず規制は残っているし、許認可はうるさいし、土地は高いし、いろん

なことで逃げてしまう。

小室 中国返還後の香港は沈むだろう、香港資本が再投資先を求めてくるに違いないとみて、それを神戸の復興に入れるように提案した。料理人にとって香港は息苦しいところになるだろうから、料理の鉄人もつれてきたらいい。と。パソナの南部靖之君もそれに乗って、動きがでてきたのだが、結局行政の壁にぶつかってしまった。

浜野 沖縄でも同じようなことがあった。台湾の党営企業軍団が一十億円の投資先を探したのだが、規制に阻まれて何もできないと帰ってしまった。最近になって、外資と日本の一流企業を組ませて事業をやる動きがでてきたが、その場合でも行政指導がつきまとう。

諸岡 地震のあと、神戸復興についての座談会をやったとき、美しいまちをつくらうと提案した。震災は不幸なことだったけれど、美しいまちをつくるには千載一遇のチャンスなのだから、美しいまちづくりをスローガンに掲げよう、美しいまちをつくれれば世界のまちななるのだからと、さかんにいつたのだが、あとが結かない。去年建築雑誌に、いまからでも遅くはないと書いたが、反響はなかった。

浜野 東京の表参道にはいま、世界のブランドが集中してきている。いいビ



小室豊允さん

浜野安宏さん

ルが建つと取り合いが起こるほどで、パブル崩壊のあと急反騰している地域だ。なぜかという、それはまちが美しいから。本当にいい街並がつくれたら、担保能力もあがってくる。

諸岡 ニューズウィークだったか、全米の金持ちにあなたが世界中で一番行ってみたい都市は、というアンケートをしたところ、一位に選ばれたのはサンフランシスコだった。一九三七年にゴールデンゲイト橋が完成したときに当時のサンフランシスコ市長が、これでシスコは全米の交通の結接点になつたがまちに魅力がなければ将来の繁栄

はない、それには美しいまちをつくらなければいけないといったものを讀んだことがあって、とても印象に残っている。市長の発言から五十年たつて、目指したとおりのまちになった。ぼくがいま、美しいまちを、とスローガンを掲げてでも実現には五十年かかるだろうが、それでもやらなければいけないと思う。震災後のまちは、美しいとはいえない。

浜野 アメリカの友人で、「パタゴニア」という自然保護に熱心なアウトドアブランドのオーナーが日本でフラグシップ・ストアを探したのだが、不動産情報で集まってくるものは、どれもひどくてとても入る気にならないという。仕方がないので、ぼくの会社もいっしょになって空き地を探してオフィス&ストアビルを建てた。不動産業者がもつてくるどんな物件よりきれいなオフィスになった。こうでもないかぎり、いい建物を手に入れる方法なんてない。小室 建物については、外国人から不満の声をよく聞く。

浜野 ソーホーというスモールオフィス、ホームオフィスを、通産省、建設省の肝入りで増やそうとしているが、ソーホーを求めているのは急成長しているデジタル系の、つまり新しい感覚をもった人たちだから、従来のマンシ

ョン業者の感覚のものでは満足できない。で、ぼくらのところに期待が集まってきた、浜野ブランドのソーホービルをつくってほしいという署名運動まで起こってしまった。

浜野 グローバルスタンダードで見なければいけない。その基準に照らすと、神戸はある水域を出られるかどうかというところ。個人が小さな財産を貯めこむようなことをしては沈んでしまう。このことはぜひ真剣に考えてほしいと思う。

天才誘致の時代 手本は世界中にある

小泉 皆さん外国の都市の事情にお詳しいが、何か手本になるようなことは

げるといって、若手の優秀な指揮者を呼んできて支援した。その指揮者が世界的に有名になって、彼がいるところだといつてもまちがよみがえったという例もある。

浜野 ひとりの天才を引っ張ってくることによつてまちがよみがえるケースがある。そのいい例がシアトル。マイクロソフト社のビル・ゲイツを誘致したおかげで、いまシアトルはすごい。

浜野 それはビートルズに学んだことだろう。リバプールなんていうどうしようもない田舎町を世界のリバプールにしてしまったもの。

小室 ホーイング社といっしょに沈んでいったシアトルを、ビル・ゲイツがひとりで豊かにした。

小室 そういう例は多い。

浜野 ひとりの天才を誘致したら、三千人くらいがついて来る。これからは工場誘致の時代じゃない。天才誘致の時代だ。

浜野 ただ、天才を呼んできてもその人をサポートする体制をきちんとつくらないといけない。ニューヨークには世界中からアーティストが集まっているが、それはある収入以下のアーティストから税金を取らないとか、ソーホーの倉庫としてしか使えないところを、アーティストに限って住んでもい

小室 イギリスの鉄鋼のまちがダメになったとき、その市長が偉い人で、天才がひとりいれば鉄鋼の分くらい稼

いという法律をつくるといったビッグ・アップル戦略が功を奏した。勝手にニューヨークに集まってきたわけではなく、後ろに行政の力が働いている。天才を呼んでくるということを神戸の起死回生の一手にするには、そういう企みが必要だ。

諸岡 神戸にはシンボルがない。ファッションタウンの十周年事業をやるうということになったとき、このまちはこういうシンボルの下でやっていくというイメージをつくらうと盛んに言った。ぼくはそのときちようどつくば博に関係していたので、しばらく神戸を離れたあと戻ってきたら、レーザで絵を描くとか、CDを出すとかチャマしたものでばかりになっていて。何か人の心を揺るがすようなものが要る。神戸空港もシンボルになると思うが。小泉 以前、復興事業として神戸で博覧会をやったかどうかという意見が出たが、これについては。

浜野 もう博覧会の時代ではないと思う。従来型の博覧会は、会期が終われば博覧会施設を全部取り壊して撤去するという条件がある。つまり、それはムダを生産するというのと同じこと。最近の環境問題を考えても、全面的に賛成というわけにはいかない。あえて考えるなら、十五年、二十年という長

期計画で施設を活用するという方向が望ましい。いうならば、EXPO15年、EXPO20年という発想はどうだろうということだ。

小室 アメリカで一番いいまちとして国連でも表彰されたテネシー州のチャタヌーガというところがある。ここはまず、まちのつくりかたが大変すばらしい。対角線の一番端に歓楽街を、反対の端に水族館を配し、全体をセットバックして、きれいな山並みがまちを歩きながら見られるようにできている。そして一番の売り物がエコロジー。クルマなしで生活ができるように電気バスを走らせている。こういうふうに、エコ・シテイみたいなものをつくるのも、ひとつのポイントかもしれない。

浜野 ミズーリ州のブランソンというまちはいま、新しいカントリーミュージックのメッカになりつつある。元々は何もない田舎のまちだったのだが、ウエスタンを演奏するライブハウスが一軒でき、ウエスタン風の宿泊施設ができというふうに、だんだん増えていった。いまではブランソンというだけでも知っているほどで、週末になるといろんなところから人が集まってくる。これは一見すると自然発生的に生まれたようだが、実際にはブランソン市なり、地方なりが肩入れしている。

音楽でまちおこしをした好例だ。

小室 沖繩ではカリブ海をイメージしたりリゾート地をつくらうというカリブ海構想がでてきたが、私はだいぶん前から、神戸は海岸線がよく似ているエーゲ海構想を打ち出すべきだと言っている。中でも美しいまちをつくらうえ

「三ノ宮駅」と「淀川長治記念館」をシンボルに

小泉 シンボルが要するという意見がだが、現在の神戸でシンボルをつくるとしたら、どんなことが考えられるだろうか。

小室 一案としてJR三ノ宮駅の建て替えがある。三ノ宮駅を魅力的なものに建て替えたら、神戸のまちはずいぶん変わってくるのではないか。

浜野 それはいい。すごいシンボルになりうる。

小室 どこにでもある駅ビルみたいなものでなくて、建物もすばらしい、中のソフトもすごくいいというものをつくれば。周辺のビルと一体化させることができれば、よりいいものが生まれると思う。

浜野 京都駅を見てきたところだが、あれは建築としてすばらしいし、じつ

で神戸のモデルになるのはニース。海岸線をネックレスロードというかたちでつないでいる。また空港は、天井が開閉式を採用してとても明るい。これも同様に、晴れた日が多くて日照時間の長い神戸には参考になると思う。

に感動的な空間がつけられている。神戸でも、風景の基盤になるもの、これまでのスケールを超えたものをつくらないと。その点、三ノ宮駅はいい。一番中心にありながら、忘れていたところかもしれない。ランドマークになるし、それによって神戸がコロっと変わるかもしれない。

それと同時に、新しい会社を起こしやすいうサポーター体制をつくり、新しい住民たちが暮らしやすい環境を整えることだ。

諸岡 クリントン大統領が、ソーホー・ビジネスに対して減税するようにという調書を議会に送っていた。いまの日本ではムリだが、ほんとうはそういう発想がほしい。

浜野 特例街区のようなものにして、



小泉康夫

諸岡博熊さん

そこに住んで働くひとたちからはしばらく税金をとらないとか。地震の起こった土地というイメージは、まだ人々の意識に残っている。それでもなおかつ神戸に来て働こう、暮らそうという人を誘うにはそれなりの条件を整えないといけない。そうしないと、皆東京へ行ってしまう。

小室 人材誘致とともに、社会の基本となるモノづくりもおろそかにはできない。しかしその場合も、従来型を踏襲してはダメだ。長崎の三菱造船所では、そのロボットしかできない溶接技術をもっているために注文が相

次ぎ、このさき三年分の受注を抱えているという。また、神戸製鋼所でしかつくれないエンジン弁の鋼があつて、それがために地震で神戸製鋼所が倒れたとき、デトロイトの自動車産業が真っ青になったという話もある。そういうふうには、何か付加価値をもった工業を目指す必要がある。

浜野 トヨタが「二十一世紀に間に合った」とうたつて開発したハイブリッドカー、「プリウス」が注目を集めている。あのクルマはたいへん費用がかかっている。あの価格ではとても売れないのだという。それを売るところに企業の意欲が感じられる。そういう例が、あちらこちらの地方でいっぱい出てくるようにならないといけない。

小室 もうひとつ、神戸のシンボルとして、この間亡くなられた淀川長治さんに関連した施設、淀川長治記念館のようなものをつくることをぜひ提案したい。神戸と淀川さんは切っても切れない関係。フィルムや資料もたくさんある。

浜野 それは、もしかしたら決定打になるかもしれない。ほかに持っていかないうちに、ぜひ早くやらなければ。

諸岡 ぼくは前から博物館構想をもっている。たとえばポートアイランドの公用地にミニ・ミュージアム、ファッ

シヨントアウンに行けばファッションのミュージアムというふうな。淀川さんのミュージアムもその中に位置づけられる。

浜野 チマツとしたものではなくて、淀川長治のシネプレックスみたいなものをつくる。映画館を二〇一三〇館くらい並べて、あそこに行つたら映画が潤沢に、立たずに観られるというふうにして、そこに淀川長治のミュージアムを併設する。

小室 場所は、これも神戸っ子にとつてシンボリック的存在である新開地の聚楽館の跡地もいい。

小泉 諸岡さんは、以前から「ミュージアの館」をつくらうと提唱しておられるが。

諸岡 二十一世紀には文化芸術の時代がやってくるのは必至のことと思われる。さきほど博覧会の是非について話したが、博覧会をただ漫然と開くというのではなく、神戸独自のブランドをもつべきだと思う。文化の殿堂を充実させて、それこそ創造の女神であるミュージアの神をテーマにした館を、世界の建築家に提案してもらおうといううな、独自性と創造性に立脚したプラ

市長でマスタープランを

浜野 あそこは広いから、かなりのものができる。

諸岡 新開地が大変貌するだろう。

浜野 ぼくも日大映画学科卒で、元はいろいろな事情で現在のような道に入ってしまったが、いまでも映画との縁が切れたわけではなく、毎朝四時に起きてシナリオを書いている。シネプレックスと淀川長治ミュージアムの話には、ぼくにとつても長いロケハンを終えて元の道にもどつてきたような思いがある。

ンを展開してはどうか。

ミュージアムは創造の神で、ギリシャ神話に起源がある学芸の神ムーサの英語名。歴史、叙情詩、喜劇、悲劇、合唱歌舞、独唱歌、讃歌、天文、叙事詩をつかさどる女神である。これらの分野を今日的に分類して、芸術文化のテーマ館を恒久的なシンボルとしてつくつてはどうかと考えている。映画館があり、美術館があり、図書館があるといううな。

浜野 クラシックな建築にして、女神が柱を支えているような建物にすれば

いいのでは。

小室 場所はNHKの跡地を充てればいい。聚楽館には淀川長治ミュージアムとシネプレックス、NHK跡地にはミュージズの館」と(笑)。

諸岡 近代美術館を東部副都心にもつてくるという案、あれも行政の発想だから……。どういふふうになっていくのか、いまじつと見ているところだ。

小室 神戸製鋼所と川崎製鉄の跡地、全部で二百十ヘクタールあったのだが、震災のおかげで復興住宅が建ってしまい、その残されたところに美術館を、ということになった。神戸に残された最後のまとまった土地だっただけに、残念でたまらない。じつはあれ、ぼくが委員長をしていたのだが。

そのほか残された土地というと、王子動物園とその周辺。あそこもうまく考えればもうひとつのまちができる。

浜野 その気になって見直せば、いっぱいあるはず。民有地も、いまたくさん空いているから、それを経済効率を考へながら利用していくという方法もある。土地と地価をプロットして、容积率をだして、ここにはこれ、あそこにはこれとはじめこんで総合計画をつくらばいい。公共は公共で、民間は民間でそれぞれつくって両方から知恵を集めることだ。

小室 市民でマスタープランを立てればいい。それが本来の姿だと思う。

小泉 既成街区を見ていて残念に思うことが多い。ポर्टアイランドのファッション街区は、浜野さんが界限の必要性を力説されたができなかった。

浜野 ぼくのオフィスがあるのは原宿と渋谷の間なのだが、その周辺にはアークセラー学園とかモード学園とかがいっぱいあって、学生たちが地べたに座って弁当を食べながらファッションの議論をやっている。そういうことが裏原宿の文化を育ててきた。それができなところは、結局ダメだ。

小室 ファッション街区は行政の規制をはずすべきだ。神戸市が売りやすいところをぜんぶ売った残りの土地だったから、浜野さんもずいぶんやりにくかったと思う。インスティテュート・オブ・ニューヨークのファッション大学を神戸につくることになったとき、ファッション街区にもつて来たときに、ファッションのまちと頭脳が結びついたら、ずいぶん違ったものになっただろう。結局、西区の学園都市に行ってしまったが。

諸岡 ファッショントウンの企画委員長をさせられて、活性化案をいろいろ出したのだが取り上げられなかった。各ビルの一階にミニ・ミュージアムを

置いて、日本中どここのまちにもないようなファッショントウンにしよう……。が、結局行政から横やりが入って実現しなかった。看板ひとつにしても、色、掛け方にまで規制がある。ちよつとおかしいと思うことが多い。

NPO法案ができたが、あれも行政の姿勢が問題。行政に都合の悪いことは認めないといっているのでは、ポラティアでやっている人たちは立つ瀬がない。公的な存在ではなくなるわけだから。

浜野 アメリカでは、一文なしでも簡単につくれる。三年間事業をやらなかつたり、事業の質が悪いといったん潰されるが、また改めてつくれる。だれにでもできるし、チャンスはいくらでもあるというわけだ。それでいいのではないかと思う。

小室 ドイツも同じ。行政があらゆるものを抱え込まないと気が済まないのは日本だけではないか。

諸岡 国民の間に、パブリックというものに対する考えが成熟していないのではないか。

小室 そう思う。パブリックとは行政だというイメージがある。

諸岡 パブリックイコール税金という捕らえ方が強い。このあたりが国民の側から直らないかぎり、行政も直らな

いのだはないだろうか。PL法をつくられたラルフ・ネーダーのような人は、日本では潰される。行政にとつてつうが悪いから。

まちは、その気になれば、もつともつと美しくできる。それがまた、新たな活力を生む。一九九九年から二〇〇一年までの三年間に世界各地で起きるであろうことは、都市、大学、ミュージアムなどの間のパートナーシップ。これは百年に一度しかこないチャンスだと思う。ここで神戸がインターナショナル・パートナーシップの交流を率先してやらなければ。

浜野 東京の渋谷駅前で、ぼくはいま、Qフロントというプロジェクトをやっている。そこには世界一のデジタル画像が実現するし、デジタル系のあらゆるおもしろいものが入る。また、表参道には世界のブランドが集まってきている。世界中が東京を重要地点と見ているし、東京の人にも勢いがでてきた。そういう中で、では関西は、神戸は何かというふうな見方をしていかないとけない。

小泉 いろいろ幅広くお話しをうかがってきたが、最後にこれからの神戸に向けてのひとことを。

諸岡 繰り返すが、人間の五感を喜ばせる美しいまちをつくる、これしか



JR三ノ宮駅の再開発が神戸復興のシンボルとなる

と思う。原口元市長は、猛烈な反対にあいながらもがんばって、とうとう「夢のかけ橋」を実現された。ひとつの事業を成し遂げるのは大変な時間がかかる。このまちをよくしようと思つたら、じつくりと腰を落ち着けてやることだ。

小室 神戸の売りは感性の良さだと、感性都市を提案してきた。地震で傷ついていたが、最近では観光客も徐々に戻ってきた。全国の人にとって、感性のいい都市神戸はまだ生きている。これは救いだし、神戸っ子はそのことをよく認識する必要がある。

また神戸は、ちよつとましな地方都市、というのをやめて、思い切った国際都市にならなければいけない。国際都市というのは異文化都市なのだから、ウィーンやパリのように、アラブ、アフリカの人たちがふつうに歩いていて、異文化が摩擦をおこすようではいけない。そんな仕掛けがつけられる国際都市を目指すことだ。

浜野 さきほどもいったように、世界が東京に目を向けている中で、また福岡がアジアとの連携を強めている中で、関西は、神戸はということをもう一度考えてみる必要がある。とくに対アジアについては、福岡に中核をもつてい

かれるか、それとも神戸がやれるのか、その瀬戸際にきていると思う。スケールを大きくして考え、胸を広げて何でも受け入れることだ。

とにかく一度やってみればいい。世界の資本を受け入れてショッピングセンターでも、カジノでもつくってみることだ。土地、建物も含めて企業の収益を十〜十五年見てみる。一回転したところでダメなら出ていってもらえばいい。こうしたら美しいまちになる、とやってみてダメだったらやり直せばいいことだ。話が最初に戻るが、自分中心主義を改めないといけない。自分の利益になりそうなものがチラチラするとそつちに走り、過剰な私有化にこだわることを改めて、皆でやるのだという意欲を持つことが、ぜひとも必要だ。これは、シンボルをつくるエネルギーを高める以前の問題。何をしても最後には「そこまでしなくてもこのあたりでいい」とか「これは自分のものだから」というところに行き着いてしまふようでは、二十一世紀の神戸は、本当に沈んでしまうと思う。

小泉 ありがとうございます。これからも引き続きご助言、ご批判を願っています。

(98年11月16日、新神戸オリエンタルホテルで)